

JAMSTEC Library Communication

「科学道 100 冊」 2019

今回の展示テーマは、「科学道 100 冊 2019」。
理化学研究所と編集工学研究所の共同プロジェクトで選定された
教育視点の科学書 100 冊です。
科学の面白さ、素晴らしさをお伝えします。



『ふしぎなたね』 安野光雅作 / 童話屋刊

1個焼いて食べれば1年間おなかが空かず、地面に埋めれば秋に必ず実って2個になる不思議なタネ。仙人がなまけものの男にさずけた不思議なタネを通じて、数の概念や未来の予測について学ぶことができます。絵や色彩も美しく、何度でも繰り返し読みたくなる絵本です。

『ねじとねじ回し：この千年で最高の発明をめぐる物語』

ヴィトルト・リップチンスキ著；春日井晶子訳 / 早川書房刊

この世で画期的な発明のひとつ、ねじ。ねじがこの世になかったなら、本箱だって家だって作れません。ねじのほかにも中世の火縄銃から現代の道具まで、この千年間で人々の暮らしを支えた道具がいかんして発明されたのかをイラストたっぷりで書き下ろしたショートエッセイです。



『賢治と鉱物：文系のための鉱物学入門』

加藤碩一，青木正博著 / 工作舎刊

宮沢賢治の童話や詩文には、鉱物が数多く登場します。地質学に詳しくなかった賢治は色の比喻などに度々鉱物の名前を使いました。この本は賢治の作品を引用して、描かれた鉱物を科学的に解説し、さらに写真と共に色別にまとめた個性的な鉱物学の入門書です。文学と鉱物学、双方の奥深さを楽しめるのはちょっと贅沢です。



『奇跡の脳：脳科学者の脳が壊れたとき』

ジル・ボルト・テイラー著；竹内薫訳 / 新潮社刊

この本の内容を端的に紹介するなら、脳卒中になった脳科学者の罹患から回復までの体験記、となるでしょうか。しかし作者は自分が"回復した"という表現に違和感を表明しており、アインシュタインの「未来の自分のためなら、今の自分を棄てる覚悟がある」という言葉を引用し、脳卒中からの復活は過去の自分に戻るのではなく、自己をより良い精神に再構築することだと主張しています。実際に脳卒中を体験した方やその周囲の方に価値のある資料であるとともに、なんとなく手に取った人にとっても脳神経科学に興味がない一冊です。

